

◇===== [第 17 号] =====◇

唯契の窓 唯物論的社会契約論研究所月報

2019 年 9 月 1 日

◇=====◇

「今年の夏も・・・」という評価をするにはまだ少し暑いようです。私の子ども時代の頃の記憶からすると、「日本の夏は長くなったなあ～」というのが率直な感想です。郷里が篠山（現在は丹波篠山市）なので、夏の間でも昼夜の寒暖差が大きく、昼間は暑く夜は涼しいという内陸高地の盆地の典型的な風土だったのですが、夏休みの終わるころになると朝夕に秋の気配を感じたものでした。

しかし最近の気候は違います。夜でも気温が下がらずいつまでも暑い状況が続いております。丹波黒と呼ばれる黒大豆も、昼夜の寒暖差があればこそ大粒で美味しい豆が実るのですが、夜の気温が 15 度（だったと思う）を超えると大豆自身の呼吸活動が日照のない夜間でも活発なままで、折角ために蓄えた養分を自分自身で消費してしまうという現象が起きます。高温障害と呼ばれる現象の一つです。この話は神戸大学農学部で黒豆の研究をしていた父から聞いたのですが、温暖化の影響で丹波黒が食べられなくなるというのはなんとしても避けたいですね。そもそも今年の夏はラニーニャ現象の為に冷夏になるという予報だったはずなのですが・・・。

さて今月から紙面の内容を変更してお届けします。

重点を時事批評におきながら、それに関連する形で理論解説も行うという形式に変更いたしました。今月もよろしくお願いします。

●===== [時事批評] =====●

今月話題にするのは「レバレッジ・ローン」です。

レバレッジ・ローンあるいは CLO(ローン担保証券)と呼ばれる金融商品ですが、いまアメリカで 64 兆円規模にまで膨らんでいるそうです（註 1）。

レバレッジ・ローンとは何か。GIGAZINE2019 年 1 月 22 日の記事には次のように解説されています。

「レバレッジド・ローンは信用格付けの低いアメリカ企業に対して比較的緩い規制の下に貸し出される金融商品です。債務者は信用格付けの低い企業であることから、当然ながら金利は高くなっています。」（註 2）

問題はこのレバレッジ・ローンがかつてのサブプライムローンと全く同じような構造を持っていることです。違うのは債務者が企業か個人かということぐらいで、信用の低い債務者が高利で資金提供を受け、その高い利息を目当てに金融機関（銀行や証券運用会社）がいささか過熱気味に資金を供給していると

いう図式には何の違ひありません。

サブプライムローンの総額が1兆3000億ドルだったのに対し、現在のレバレッジ・ローンの総額は1兆2000億ドルと市場規模もかつてのサブプライムローンに迫る勢いですが、当事者はまだまだ成長するという見通しを語っており（註3）、最終的にどのような規模に膨れ上がるかは未知数と言うところです。

ところでこうした不安定な債権を購入しているのはどのような人なのかというと、実はレバレッジ・ローンの3／4を購入しているのは日本の金融機関なのだといいます（註4）。しかもその資金には年金基金からも1500億円が拠出されています。私たちの年金がこんなところに使われているわけで、他人事ではありません。

ではこのレバレッジ・ローン、この先も安定的に運用することは可能なのでしょうか。実をいうと、というよりまあ当たり前の話ですが、綻びは目に見えています。事実、レバレッジ・ローンが売れなくなる事態も生じ始めてきました（註5）。

こうした金融商品は本質的な弱点として、実体経済とはかけ離れた場所で取引される株価に連動しているという問題を抱えています。この実体経済を反映しない株価が、実際の企業の資産状況に反映されてしまうという問題は金子勝氏によっても指摘されてきたところです。つまり、企業の価値は実体経済以上に高く評価されてしまう可能性が高く、企業の信用を担保にして資金を貸し付けるというその時点ですでに水増しが入ってくるわけです。そうした信用貸し付けは、景気の先行きが不透明になると不安定します。

そしてその不安定化局面は、トランプ大統領がはじめた対中国貿易戦争や諸外国との貿易における身勝手な条件変更などにより、急速に高まり始めた実体経済悪化の様々なリスクの表面化に伴い、現実化しつつあります。

既にアメリカでは産業分野が主導的な地位から陥落し、各種のサービス分野や金融分野が主導的な地位を占めるに至っています。その中で進められる金融緩和は、産業分野での活性化よりも、金融分野でのより投機的な資金運用に対する動機を高めるほうに働く可能性も否定できません。

加熱する投機的な資金の流入は、新たなバブルの発生要因となり、それがはじけた時の衝撃はリーマンショックの再現となりかねません。少なくとも日本の金融機関がその崩壊に巻き込まれる危険は以前のリーマンショックよりも大きくなること（金融恐慌）は予測の範囲内と言えるでしょう。

唯物論的社会契約論からの警鐘としては、少なくともアベノミクスをすぐに

停止し、最低賃金の引き上げ、消費税の廃止、社会保障の充実、法人税の適正化（すなわち大幅増税）を進め、内需の早急な拡大を図り、投機的資本運用を改めて国内需要に振り向けるように手を打つことを提言しておきたいと思います。

註 1 NHK の「おはよう日本」ホームページから引用。URL は下記参照

(<https://www.nhk.or.jp/ohayou/biz/20190827/index.html>)

註 2 GIGAZINE の記事は下記 URL 参照

(<https://gigazine.net/news/20190122-us-leveraged-loan/>)

註 3 NHK 前掲 URL

註 4 ブルームバーグ 2018 年 12 月 17 日付

(<https://www.bloomberg.co.jp/news/articles/2018-12-16/PJQ6BQ6JTSE001>)

註 5 ブルームバーグ 2019 年 8 月 20 日付

(<https://www.bloomberg.co.jp/news/articles/2019-08-20/PWILKI6JTSE901>)

●=====●

□===== [理論解説] =====□

今月の時事批評ではレバレッジ・ローン(CLO)の危険性について触れました。

唯物論的社会契約論では、そもそも経済活動において利子（配当を含む）および地代は排除されるべきものとして考えられています。したがって、唯物論的社会契約論に基づく経済制度（社会主義的経済制度）においては、今日の投機的な資本の運用（証券取引・株取引）などは存在する余地がありません。

社会主義的経済制度は資本主義的経済制度、特に金融資本主義に比べるとはるかに安定した経済運営が保障されます。それはとりもなおさず国民生活が安定することを意味するわけです。

社会主義的経済制度への移行は、技術的にはさして難しいことはありません。多くの国民・勤労者の皆さんがそのような経済の在り方を知らされておらず、「社会主義と言えば独裁政治」といった誤ったイメージを抱かされているということが最大の障害であり、それさえ克服できれば国民自身の力で経済の仕組みを変えられる。それは常に語り続けるべき希望の福音であると言えるでしょう。

□=====□

★===== [コラム] =====★

この夏当研究所では輪転機を導入しました。正確に言えば輪転機ではなく、デジタル孔版印刷機というのだそうです。

私が学生時代に学生自治会の備品として存在した輪転機は、手書きで原紙を作成し、間違った文字は修正液で穴を塞いでその上から書き直し、輪転機のドラムにこれをセットして印刷するという代物でした。手間はかかるのですが、大量の印刷物（例えば学生大会の議案書とか大学祭の案内だとか）を刷り上げるほぼ唯一の手段でした。もちろんモノクロで写真などの掲載も無理。

そこに登場したのがファックス原紙というもので、これは回転するシリンドラの左側に原稿を、右側にファックス原紙をセットしてスイッチを入れると、左側の原稿を光学的に走査し、色の黒い部分があった時に右の電極針から筒身に向けて放電させることでファックス原紙を焼き切って謄写版（輪転機）用の印刷原紙を作成するという優れものでした。その原理は左手で原稿部分を抑えながら右手でファックス原紙をセットしようとしたときに、指先から火花が飛んだことで文字通り身をもって知ったわけですが・・・。

デジタル孔版印刷機はコピーのように原稿を読み取って自動で原紙を作り、印刷ドラムにセットしてくれて、後は自動でお望みの枚数を印刷してくれる上に、色別に原稿を作れば多色刷りも可能というものです。購入したドラムは黒・赤・緑の３色で、三色刷りが可能です。流石にオフセット印刷のように印刷される側の用紙をきちんと設置できるわけではないのでカラー印刷までは無理ですが、それでもモノクロ写真ならある程度鮮明に印刷できます。

この夏この輪転機を使って『唯契の窓』の夏号外を作成しました。近所の大学の夏休みが終わったら、学生さんを対象にして配布する予定です。デジタル情報が主流の今日ですが、やはり人目に触れるのは紙の印刷物・・・。一人でも多くの方に唯物論的社会契約論という考え方があるのを知っていただきたいと思っております。

★=====★

次回の発行は10月1日を予定しております。